

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	西山 健太
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
小・中・高の体育授業における持久走教材に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授 上田 毅		
審査委員	教授 出口 達也		
審査委員	教授 松原 主典		
〔論文審査の要旨〕			
<p>小・中・高の学習指導要領解説によれば、学校体育において長い距離を走る活動は2つの領域において取り扱われている。一つは体づくり運動における持久走で、長く走り続けることに主眼を置くものである。もう一つは陸上競技における長距離走で、陸上競技の特性である記録への挑戦や競争の楽しさや喜びを味わわせることをねらいとするものである。本研究では小学生・中学生・高校生を対象に、ねらいの異なる全力法、内回り法、RPE法の3種類の教材を実施することによって、持久走の特性や魅力が引き出されたかどうかを客観的指標及び主観的指標から検討するものである。</p> <p>本論文は5章から構成され、第1章では研究の背景と目的を検討した。</p> <p>第2章では、小学生を対象に、持久走の特性や魅力を引き出し、好意的態度を育成する指導の示唆を得るために、全力法、内回り法、RPE法の3種類の持久走を実施し、客観的及び主観的指標から各教材の特徴を検討した。小学生は全力法では序盤に顕著なオーバーペースとなり、記録や順位のためのペース配分とは一致しなかった。また、心拍数は激しい苦痛を伴うほど高いレベルであった。内回り法ではコース設定によって競い合いが促進されたために、ペース配分や運動強度は最大努力に近いものとなった。RPE法ではスピード出力を調節する能力が未発達であったために、ペース配分や運動強度は他の教材との間に差がみられなかった。そして全力法は苦痛を伴うが、それ以上に記録や順位の向上という持久走の特性や魅力が好意的態度を育成するうえで有効である。ただし、記録や順位の向上を十分に引き出すための取り組みも必要である。内回り法によって好意的態度が高く維持されるものの、競争的要素の強調により、成果のために忍耐しながら走るというネガティブな側面も生じる。そのため、導入に際しては対象者の持久走に対する意識を把握する必要がある。RPE法によって持久走に対する好意的態度が高く維持される。主観的感覚によって適切に運動強度をコントロールするためには、主観的運動強度と客観的運動強度を対応させる取り組みを加えるべきであった。</p> <p>第3章では、中学生を対象に3種類の教材の特徴を検討した。中学生は全力法では序盤に顕著なオーバーペースとなり、記録や順位のためのペース配分とは一致しなかった。また、心拍数は激しい苦痛を伴うほど高いレベルであった。内回り法ではコース設定によ</p>			

て競争が促進されたために、ペース配分及び運動強度は最大努力に近いものとなった。RPE 法では主観的感覚により、運動強度を低く抑えながら、走速度を一定に維持して走ることができた。このように全力法は苦痛が持久走嫌いの要因となるため、他の教材と組み合わせるなどして、記録や順位の上昇という特性や魅力をより十分に引き出すことが重要である。内回り法は競い合いや駆け引きといった持久走の特性や魅力を引き出し、苦痛が顕在化しないので、好意的態度を育成することができる。RPE 法によって低い運動強度を維持して走ることができるので、長く走り続けることによって動きを持続する能力を高めるといった持久走の特性や魅力を引き出しつつ、好意的態度を育成することもできる。

第4章では、高校生を対象に3種類の教材の特徴を検討した。高校生は、全力法では序盤に顕著なオーバーペースとなり、記録や順位のためのペース配分とは一致しなかった。また、心拍数は激しい苦痛を伴うほど高いレベルであった。内回り法では多くの者が走速度を維持するための内・外的指標を利用したことで安定したペース配分を実現できた。また、心拍数は最大努力と同程度に高かった。RPE 法では主観的感覚により、運動強度を低く抑えながら、走速度を一定に維持して走ることができた。そして全力法は苦痛が持久走に対する好意的態度の育成を妨げるため、他の教材と組み合わせるなどして、記録や順位の上昇という魅力を引き出すことが必要である。内回り法は自己に適したペースを学ばせることで好意的態度を育成することができ、記録の上昇も期待できる。RPE 法によって低い運動強度を維持して走ることができるので、長く走り続けることで体力を高めるといった持久走の特性を引き出しつつ、好意的態度を育成することもできる。

第5章では、小・中・高と連続して持久走の特性や魅力を引き出し、持久走への好意的態度を育成する指導の在り方について総合的に考察した。その結果、同じ対象者であっても3種類の教材はそれぞれ異なる特徴を備えていることが明らかとなった。さらに、同じ教材であっても、対象者の発達発育段階によって作用や効果が異なることが示された。そのため、指導に際しては対象者の属性を把握し、教材の特徴を生かすことで、持久走が持つ多様な特性や魅力を引き出しつつ、好意的態度を育成することができると考えられた。

本論文は次の3点で高く評価できる。

1. 学校体育において持久走教材について、小・中・高校生の生理、心理的な指標をもってその特徴を明らかにした。
2. 実際の指導を行っていく際、異なる方法論を採用した場合のそれぞれの持久走の長所と短所を明らかにした。
3. 各年代における持久走指導における留意点について明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3年 2月 12日